

トピックス

初めての「浜降祭」！



深夜2時、「どっこいどっこい！どっこいどっこい！」と聞き慣れない勇壮な掛け声と共に、神社を出て海へと向かう神輿。白い半纏に青い鉢巻姿で、一見爽やかに見える装束の担ぎ手達が、力強く神輿を運んで行く様を、提灯の明かりが燈る参道にて暫し見送りました。茅ヶ崎市移住2年目の昨年7月、映画やニュースでしか知らなかった「浜降祭」の宮出しを、この目で観て肌で感じた瞬間でした。しかし、これはまだ「浜降祭」のほんの一部。34社40基の神輿が西浜海岸に立ち並ぶ様は想像してみるに圧巻です。今年は是非浜で体感したいものです。

トピックス

令和7年度アクションプロジェクトメンバー決定！

市民と市職員による協働組織「アクションプロジェクト」のメンバーが決まりました！アクションプロジェクトはちがさき丸ごと博物館事業の運営を行っています。令和7年度は以下のメンバーで事業を推進していきます。

(市民)	有村幸三さん	石黒進さん	大島光春さん
	加藤幹雄さん	木村宏さん	清水りりこさん
	新國仁さん	原俊一さん	平松和弘さん
	藤田修一さん	森井健太郎さん	(五十音順)
(市職員)	仲手川武	石井芳宜	渡邊文紘
			木村和幸

今月の人！

丸博ゆかりの人物紹介 鶴田 榮太郎（つるた えいたろう）

鶴田榮太郎は、明治21年に円蔵村で生まれ茅ヶ崎市の郷土史研究を切り開いた人物として広く知られています。その功績は地方文化の保存と振興において際立ち、特に文化財や郷土史の分野で目覚ましい働きを見せました。彼の活動は歴史的価値のある遺産を広く市民に伝えるだけでなく、それらを保護し、後世に伝える基盤を築きました。

業績の主なもの茅ヶ崎市の私的研究の嚆矢となる「相模茅ヶ崎史観」を編集発行し、大岡越前祭の復活や浜降祭の県無形文化財指定などで活躍し、下寺尾の七堂伽藍跡の碑の建立の中心人物でもありました。郷土史や文化財だけでなく、河童徳利の伝説を広めて、市民の口碑伝説への関心を引き起こすなど活動は広範に及んでいます。

少年期から壮年期にかけて日記を多数残していますが、第17号「田園日記」第三篇明治38年9月11日のところに「川上音二郎・貞奴を停車場やその近くで見かけたり、芝居をするところも実見して」いることが記されています。また“あしかび”という雅号を持ち、著作を多数残しています。

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館ってなに？



2003 年よりエコミュージアム（※）という理念のもと、茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材（もちろんあなたも）などの「このまちらしさ」をもつ、いろいろな事柄を幅広く選び出し、これらの都市資源を調査・研究し、それぞれを関連付けて活用を図るのが、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」です。この活動を通じて茅ヶ崎を知り、茅ヶ崎を好きになり、茅ヶ崎を誇りに思う人を増やし、まちの活性化につなげていきます。ぜひ皆さんも私たちと一緒に丸博に参加しませんか。

※エコミュージアムとは、地域環境そのものが博物館であるという考え方で、運営する者も利用する者も、地域住民であることが大きな特徴です。

編集後記

季刊誌はアクションプロジェクトメンバーで記事を分担して書いています。最初に大枠のテーマを決めた後、それぞれが培った知識と経験を持ち寄り、「遺跡の解説を入れてみよう」「市民の活動も書いてみよう」「体験記もいいのでは」などなど話し合いました。茅ヶ崎をもっと知ってもらいたい。知ると面白い。季刊誌を手にとってくれた皆様にそんな思いを届けたいと考えています。夏本番、暑い日が続きます。帽子と飲み物を忘れずに、まち歩きを楽しんでみてください。（編集スタッフ一同）



HPはこちら

屋根も壁もない・・・市内が全部博物館・・・



愛称は「ちがさき丸ごと博物館」



丸博百景No.4 茅ヶ崎海岸 えぼし岩を望む

※丸博百景では誰でも自由に入れる景勝地を紹介します。

茅ヶ崎に存在する「日本の歴史」にとって重要な史跡を後世に引き継ぐために…

今回の季刊誌では、国指定史跡として10周年を迎えた下寺尾官衙（かんが）遺跡群を特集します。国指定史跡に認定される事は、日本の歴史を正しく理解するために欠かせない学術的価値が認められた証であり、それにより国や自治体による修理や管理、専門家の助言、補助金の活用等を通じた安定的な保存と継承が期待されます。しかもその指定は、原則として解除されることがありません。

下寺尾官衙遺跡群は、官衙遺跡の全体像が把握できるとともに、その成立から廃絶に至るまでの過程

が確認できる希有な遺跡であり、地方官衙の構造や立地を知る上でも重要だと言われています（文化庁：文化遺産オンラインより）。

この史跡が指定に至るまでには、市民をはじめとした多くの人々の熱意と地道な努力がありました。

本特集は、遺跡群の歴史的価値とそれに向けた人々の思いを紹介することで、貴重な史跡に改めて目を向け、この遺跡群を未来へ継承していく機運醸成の端緒になればという願いを込めてお贈りします。

下寺尾官衙遺跡群 国指定史跡 10周年のあゆみ

2つの重なる国指定史跡について

～史跡下寺尾官衙遺跡群 & 史跡下寺尾西方遺跡～

茅ヶ崎市と寒川町にまたがる下寺尾遺跡群は高座郡衙を含む西方遺跡、下寺尾廃寺を含む七堂伽藍跡を中心に、隣接する北B遺跡や大曲五反田遺跡、岡田南河内遺跡も含めた遺跡群です。

このうち、7～9世紀の官衙（役所）跡が残る高座郡衙と寺院跡である下寺尾廃寺で構成される範囲が「史跡下寺尾官衙遺跡群」として国指定史跡となっています。高座郡衙には、郡庁、正倉、館・厨などの建物群があり、下寺尾廃寺には、推定金堂、推定講堂があります。「史跡下寺尾官衙遺跡群」は古代の役所と寺院の成立から廃絶に至るまでの過程が確認できるとして高く評価されています。

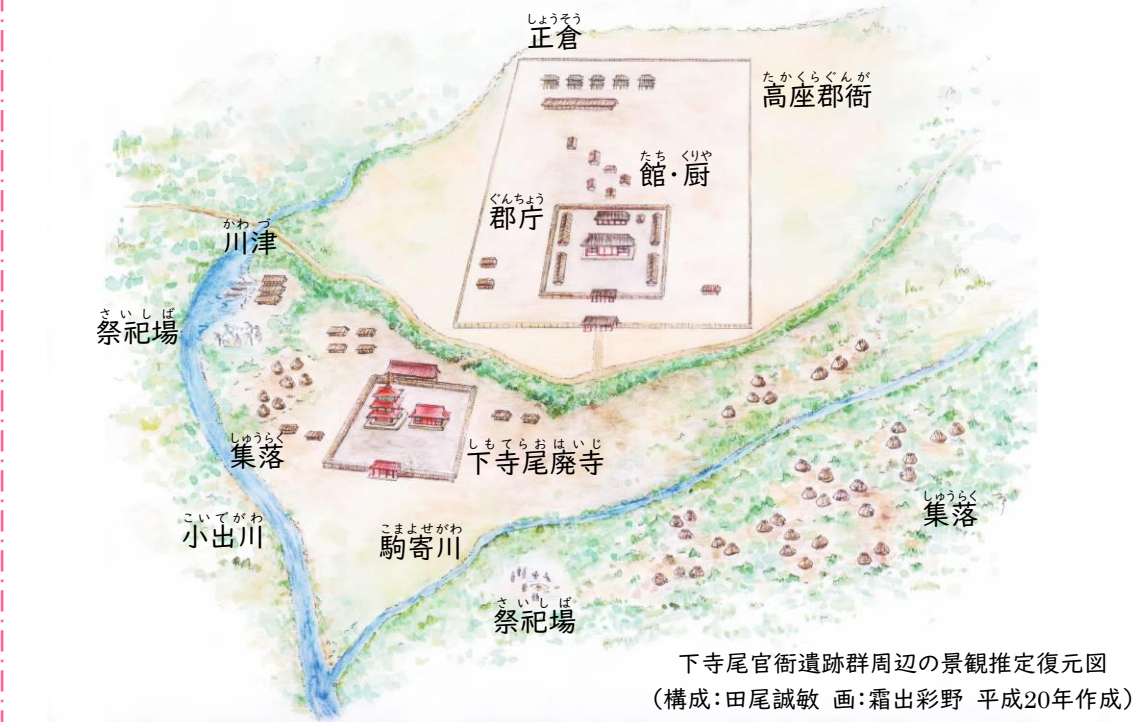
また、下寺尾には「官衙」と重なるように弥生時代の環濠集落が発見されており、こちらは2019（平成31）年2月に国史跡に指定されています。環濠集落とは周囲に堀をめぐるした集落のことを言い、「史跡下寺尾西方遺跡」は環濠集落として南関東最大級の規模です。このように下寺尾遺跡群は同じ場所において時代の異なる2つの史跡が重なっており、その学術的価値が高い遺跡となっています。

国指定史跡までの道のり これからの保存活用

1941（昭和16）年に「神奈川県史蹟巡り同好会」の会員を中心に茅ヶ崎市内の史蹟巡りを開催、七堂伽藍跡を訪ねています。当時神奈川県史蹟巡りを積極的に行っていた地元茅ヶ崎出身の鶴田栄太郎等が中心で、参加者は約100名と当時の新聞「明朗の茅ヶ崎」が記しています。1957（昭和32）年には下寺尾・香川・小出・堤など地元を中心とする142名の発起人によって「七堂伽藍跡」碑が建立されました。碑建立の趣意を「今回我等が建碑の趣意は是等の貴重な資料の保存と今後研究家の訪れるのを待つ為に他ならない。」としています。建碑から21年後の1978（昭和53）年7月18日～23日に七堂伽藍跡で初めての考古学的調査が行われました。茅ヶ崎市史編纂事業に伴う確認調査でした。1980年代は開発に伴う調査、また、1990年代後半から2000年代には、区画整理事業や河川改修事業に伴う大規模な調査が実施され、2002（平成14）年茅ヶ崎北陵高校の校舎建替えに伴う調査で高座郡衙が発見されました。茅ヶ崎北陵高校での郡衙遺跡発見の反響は大きく、2002年から神奈川県日本考古学協会等の研究団体、地元茅ヶ崎市、教育委員会、議会からも保存要望書が出され、校舎建築は中止、現状での保存となりました。

2013（平成25）年には、茅ヶ崎市教育委員会で総括報告書が刊行され、国史跡への申請がされました。そして、2015（平成27）年3月に「史跡下寺尾官衙遺跡群」として国史跡指定が決定しました。

2017（平成29）年に、茅ヶ崎市教育委員会から史跡下寺尾官衙遺跡群保存活用計画が策定され、計画に基づき遺跡内の大看板や説明版などが設置されました。今後は2つの重なる史跡について保存活用と整備の計画を策定し整備を進めていく予定です。



香川駅のまち歩きマップ



遺跡内の説明板



下寺尾遺跡文化祭に行ってみよう！

下寺尾遺跡群で毎年実施されている下寺尾遺跡文化祭（以下「遺跡文化祭」という）をご紹介します。この遺跡文化祭は「小出まちぢから協議会下寺尾遺跡部会」が中心となり、地元民や茅ヶ崎市民に遺跡の重要性を伝え、保存活用を図るため、下寺尾廃寺を中心会場に子供から大人まで楽しんで遺跡に親しめるよう各種団体も参加して開催されています。遺跡文化祭の第1回開催は2019（令和元）年10月。それ以降、コロナで中断はありましたが、2025（令和7）年10月には第5回が開催されます。

遺跡部会活動は地元民が下寺尾遺跡群の価値を認識し、その保存活用を継承していくため、遺跡文化祭の他、下寺尾遺跡群の現地見学会、橘樹郡衙見学会、文化庁主任調査官を招いての講演会、1年間で10回もの遺跡勉強会、遺跡の草刈りなど、多彩で活発なエコミュージアム活動を続けています。遺跡部会のこうした活動は大事な丸ごと博物館活動です。今後も地元丸ごと活動として次世代に繋がるよう応援して行きたいと思います。今年10月開催の遺跡文化祭へ是非お運び下さい。

国指定史跡10年を振り返って

～駆け回った市職員にインタビュー～

下寺尾官衙遺跡群の国指定史跡へ奔走した市職員 大村浩司 さんに国指定の意味を聞きました。
Q1国指定10年を迎えた感想をお願いします。
指定からの10年はすごく早かったという思いと、10年もたったという焦りもあります。前半5年は活用などが順調に進んだ面がありましたが、後半5年はコロナに加え、取り巻く状況の変化もあり、2019年に国指定となった西方遺跡を合わせた計画作りなど保存整備への進捗が遅くなっており焦りを感じています。

Q2なぜ国指定を目指したのでしょうか（国指定の意味と価値）
遺跡を保存する上では国指定とすることが一番確実です。ただ、多くの遺跡は調査後に消滅してしまいます。遺跡発見時から重要な遺跡であると感じており、何とか現状で残そうとの思いがありました。

Q3国指定を獲得する上で苦労した点を教えてください。

周辺の関連遺跡も含めた「遺跡群」となるため、膨大な資料作りとなったこと。住民と共に保存の機運を盛り上げることが大変でした。

Q4下寺尾官衙遺跡群のどこが注目点でしょうか。

全国でも数少ない重なる史跡であり「複合遺跡」を知ることができること。七堂伽藍跡は地域の人が保存に関わってきた歴史があり、文化財保護の歩みを知ることができます。

Q5最後に市民の方々へメッセージをお願いします！

是非無関心にならないでほしいと思っています。関心が薄れていってしまえば衰退につながります。地域の方々も研究者も行政もみんなで関心を持ち続け継承していってほしいと思います。（聞き手:森井）